

「経験専門家」の仲間(ピア)に 教えてもらうこと、期待していること

笠井清登

東京大学医学部附属病院
精神神経科



私は、大学医学部の附属病院という、医師・看護師・精神保健福祉士・公認心理師などの支援専門職をめざす学生や、研修医（精神科医になる人も、そうでない人も）に臨床を学んでもらうための病院で働いています。

こうした教育しながらの臨床を通じて気づいたことを、研究にも結びつけています。

15年以上経つて

私は、精神科医になつて15年以上経つてから、初めて、「当事者中心の」とか、「二一人でもとづく」といったよく使われるフレーズについて真剣にふり返るようになりました。

た。東日本大震災後の地域精神保健活動がきっかけだったと思ひます。

それまでは「専門家になら

ねば」と視野が狭くなつていました。お恥ずかしい話です。

不平等やかたより

そうして見つめ直してみると、私自身もそうでしたが、私が働く大学病院精神科という組織も、さらには日本の精神医療全体も、医師と当事者の間には、権威・知識・情報・意思決定などにおいて、さまざまな不平等やかたよりがあり、専門家側のニーズに当事者が合わせる本末転倒な関係性になつていきました。

厄介なのは、それを私自身を含め、医師が自覚していないことで、

「小さい頃から父の病院の夏祭りで患者さんに可愛がつてもらつていたから、当事者への偏見がない」などと思つてしまつていてことです。

衝撃を受けて

その後、東京大学の同僚である熊谷晋一郎さんと出会つたり、いろいろな当事者や家族の立場の方々と診察室の外で知り合つたり、浦河べてる

の家（→36頁）やイギリスのリカバリーカレッジ（※）を見学し



たりして、ようやく、何が中心で、何のニーズであるべきなのか、ということがつかめるようになつてきました。

リカバリーカレッジの見学は衝撃でした。

アサポートと云ふとや、それを仕事としている人（ピアサポート）が活躍していることを知りました。

●共に創る

また、リカバリーカレッジでは「ロ・プロダクション」という理念を大切にしていました。

当事者と専門職とが、対等な立場で、お互いの価値観や経験の違いを自覚・尊重したうえで、支援関係や意思決定を共に創っていくことです。

これまで権威も知識も情報も対等でなかつた専門職と当事者が、類似の経験をもつピ



てくださいり、それぞれの経験を生かして活躍されています。

ピアの経験は、英語では

“lived experiences”（疾患や障害にともなう生活・人生上の苦労の経験）と呼ばれていて、またその経験者である当事者、ピアは、“experts by

experiences”（「経験専門家」）と呼ばれています。

アが間にいることで、権利が守られたり、関係の不平等性が改められ、安心して話せるようになり、共同で意思を決定しやすくなります。

私はリカバリーカレッジの見学後に、いてもたつてもい

られなくなり、すぐに病院に働きかけ、精神障害のある方の雇用を実現しました。

経験の価値

それから10年が経ち、5人のピアの方々が仲間に加わつ

教えてやるけれど・ 期待してくると

自分の身体や精神に偶然降りかかった疾患や障害という

「理不尽、不条理」として感じることは自然でしょう。

「経験専門家」は、その後の

人生をどう体験したか、そし

てそれを、疾患をもつ前の人

生を含めて、どのように話し言葉・書き言葉で編み直し、

「経験」としたかという意味

での「研究者（＝専門家）」なのです。

だからこそ、その経験について聞く人・読む人が、個別

の人生の中に普遍的な人間のあり方を見出せるのです。

このことが、私が「経験専門家」の仲間に教えてもらつ

こと、期待していることです。